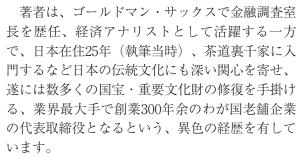
読|ん|で|み|た|い|

大阪産業経済リサーチャンター 北出芳久 総括研究員

『国宝消滅 イギリス人アナリストが 警告する「文化」と「経済」の危機』

●デービッド・アトキンソン著 東洋経済新報社 1.500円(+税)

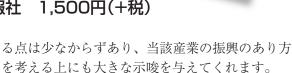


人口減少による日本経済の衰退を救うために は、観光立国は不可避だとの本書の主張は、今や さほど意外性はないようにみえます。そのような 中で本書が異彩を放っていると私が感じるのは、 あえて日本の「伝統文化」や「職人神話」の内幕 を「内部告発」したことにあると思います。その 中で、筆者は落札制度や補助金制度等、日本の文 化財行政の問題点にも鋭く切り込んでいます。

日本の文化財が利益を生み出さない上に、保護 に財政負担を強いられる「コストセンター」的な 存在になっているという本書の主張には、観光立 国を目指す日本が乗り越えるべき本質的な課題の 存在を深く印象付けるものです。

本書は、前半では特に著者の本業に関係する伝 統建築を対象に、国際比較を交えながら日本の保 存偏重の文化財政策に疑問を呈する内容となって います。また、後半では伝統産業における価格設 定、分業制、職人文化等の問題点にふれ、伝統を 特別視するあまり営業や情報発信という発想の欠 如により、需要の減少への対応を誤っていると指 摘しています。

外国人ならではの視点と、職人集団ともいえる 企業のトップとしての実体験を土台とした考察 は、率直であり、データを基にした国際比較は興 味深く、かつ説得力を感じます。おそらく関係者 からは厳しい反応もあろうことは予測済みで、日 本の伝統文化の将来を思う強い気持ちから書かれ たものと思います。私も調査の対象として伝統工 芸品産業に長年接触してきましたので、思い当た



日本の伝統的なものづくりという限られた枠内 での振興策は、生活様式が変化してしまった現代 にあっては、日常生活において使用する機会が乏 しいため、きわめて限定的な効果しか期待できな くなりつつあります。もっと視野を広げ、伝統的 ものづくりが支える日本文化に関わる衣食住の 様々な要素を結合させ、それが観光資源として光 を放つようにしなければ、このままでは全国各地 の伝統産業の多くは失われてしまうことが危惧さ れます。

確かに改革すべき点は、いろいろありそうで す。ただし、よく「伝統は革新の連続」といわれ ますが、変えるべき点と変えてはならない点を間 違えると、伝統は滅びてしまいます。その見極め が大切であることを、本書は主張しています。

辛口の主張もありますが、本書からは日本の伝 統文化に対する深い理解と愛情を感じます。外国 人の元経済アナリストの目と、日本の、それも伝 統産業を担う当事者としての目という両極の立場 にいる著者ならではの主張は、読者をひきつける でしょう。そしてそれは、単に伝統産業や伝統文 化のジャンルの話にとどまらず、観光産業とつな がることによって、人口減少社会が進む今後の日 本経済の行方を考える上で、避けて通れない論点 を提示するものといえましょう。

【著者略歴】

デービッド・アトキンソン 小西美術工藝社社 1965年イギリス生れ。オックスフォード大 学日本学専攻卒業。ゴールドマン・サックス取締 役を経て、文化財補修を手掛ける創業300年以上 の小西美術工藝社に入社、現職。本作のほか 『新・観光立国論』(山本七平賞受賞)など、日 本経済の活性化に関する著作を次々発表してい る。